昭和26年9月　洪水

福士広志
海のふるさと館学芸係長

昭和六十三年の洪水は留萌の市民にとって、まだ記憶に新しいできごとである。留萌川は過去にも大きな氾濫をおこしている。被害の規模としてははっきりとした記録はないが、明治二十六年に洪水があったことが判明している。しかし、その後留萌港の築港工事で留萌川が切り替えられ大きく形状を変えたが、大きな災害はなかった。

昭和二十六年九月一日夜半から降り出した雨は二日にはいっても降りやまず、三日、四日には突風を伴ってさらに激しくなり、遂に留萌川が決壊した。満潮時と重なったため、未曾有の水害となった。市街地では開運町、栄町の一部が床上浸水となり、市街高台に避難した。しかし、幌糠、藤山方面では留萌川岸一帯の田畑はほとんど泥流にのみこまれ、畑作は全滅した。田畑の被害は流失畑二十五・四町、冠水は田百七十九

THE RUMOI TIMES　昭和26年9月5日〔水曜日〕

留萌タイムス

幌糠、藤山の畑作は全滅か

泥海と化した七百町歩

開運町住民は小舟でひ難

留萌市の水禍

橋梁流失など

農村の被害甚大

所　留萌市幸町三丁目三番地
行　株式會社留萌タイムス社
發行編集印刷人　齋藤道忠
電話四七五番
新聞定價　月極讀料　八十圓
月極廣告料　百圓
内科　小兒科
千秋診療所
醫師　加藤ミチ子
留萌市本町五丁目
元伊藤醫院電話二二番

藤山方面では留萌川岸一帯の田畑はほとんど泥流にのみこまれ、畑作は全滅した。田畑の被害は流失畑二十五・四町、冠水は田百七十九

その中でも田畑の損害額は大きく、五千百二十四万五千円であった。この水害は昭和に入ってから留萌の市民が初めて経験するもので、

・七町歩、畑五百九十三・七町歩、計七百九十八・八町歩、浸水家屋は一千三百四戸、道路の決壊三ヵ所、橋の流出五ヵ所であった。

留萌川はそれまで河川切り換え後は氾濫したことがなかったのである。このとき、大和田のユードロ橋の流出を防ぐために活躍中の消防団員越吉太郎さんが犠牲となっている。

この災害は当時留萌市開基以来の未曾有のものとして報道され、刈いれ前の農作物はほとんど皆無という惨状であった。このため、農業の質的転換が求められ、水害に強い稲作への転換が進められて行くこととなった。従来の留萌の農業は畑作中心で、雑穀が主な作物であった。しかし、一度水を被ると畑作は取り返しのつかない大きな被害となるため、水がついても救われる稲作への転換が急務となっていった。

また、河口部分は改修が行われていたが、原野を流れる留萌川はいまだ原始河川のままであり、この改修も課題となったのである。

終戦後、やっと自作農として自立し、将来に夢を馳せていた留萌の農家にとっては、この災害を一つの転機として経営安定への努力を強いられるものであった。